

町を見下ろす 愛宕公園の文学碑群

鈴木 幹人

町の中央に位置する標高約六十五メートルの愛宕公園は、古くから、野辺地町民の憩いの場です。四季を通じて変化する様々な草花や木々の彩り、そして野鳥の囀りは、えもいわれぬ風情を醸しだし、この公園を散策する人々の心をなごませる格好の場となっています。

公園は、江戸時代から人々の憩いの場であり、その証左として公園の中腹に、文政十二年（一八二九）、野辺地社中の人々によって建立された松尾芭蕉の句碑が杉木立の下に、残されています。

この句碑の表面には、

花さかり山は

日ころの朝ほらけ

の句が刻まれています。

吉野山中にも同様の句碑が残されています。貞享五年（一六八八）春に「笈の小文」紀行中、吉野で詠んだ作とされ、「芭蕉庵小文庫」に掲載されています。

この句碑の裏側には「文政十二己丑年 孟冬五日 東奥野辺地 社中」と記されていて、東奥野辺地の社中（俳句仲間）の手で建てられたものであることが分かります。明治年間野坂東英が著した『昔のしおり』には、この時の様子について「竿石ハ狩場沢村畑ヨリ出ヅ。台石ハ烏帽子山上ヨリ古雅掬スベキ名石ナリ。筆者当有名季鷹書ニテ、石工ハ八戸肴町長兵衛彫刻ニ係ル処。発句ハ、花盛り山そ日ころの朝ほらけ、はせをト記。筆蹟彫工トモ最モヨロシ。

……(中略)……碑裏面は



松尾芭蕉 句碑